

ヒュームの帰納的懐疑主義に関する ビービー氏の見解について

一ノ瀬 正樹
翻訳：竹中 久留美

最初に、ヒューム哲学について何らかの関心を抱く一人の研究者として私の知る限りにおいて、私は、ビービー教授のヒューム因果論への理解がきわめてユニークで刺激的である、という印象を抱いたことを申し述べます。ヒューム研究の歴史を振り返ってみるならば直ちに気づくことですが、ヒュームは（おそらくはトマス・リードのヒューム解釈の影響のために）初めは懐疑主義の哲学者と理解されていました。けれども、ノーマン・ケンプスミスがヒュームを懐疑主義ではなく自然主義の哲学者とみなしたことで、この伝統的解釈は劇的に変化しました。

ヒュームを自然主義的に読む仕方に従えば、ヒュームは次のような仕方で彼の議論を展開していると考えられています。すなわち、確かに一方で、私たちの知覚についての哲学的精査を真剣にかつ合理的に行うならば、理論的なレベルである種の懐疑論に陥るに違いないであろう。しかし他方で（あるいは、より正確に言えば、私たちが理論的なレベルで陥る懐疑的な帰結に抗して）、実践的なレベルにおいては、私たちは、日々実生活を実際に生き続けるということをつねに生き生きと理解することになるのであり、したがって哲学者たちは（懐疑的な帰結を捨てて）この事実に向き合わねばならないし、私たちの想像という機能（すなわち人間本性）を考慮することで、私たちが日々の生活をいかに送っているか、そのありさまを明確にしなければならない、と。たとえヒュームの懐疑論的な論証をどう評価するかが学者によってそれぞれ異なるだろうとしても、このようなケンプスミスによる自然主義的見解は、近年のヒューム研究者たちのなかで最も支配的なものであり続けています。もちろん、ケンプスミスが強調するヒュームの自然主義は、クワインがかつて導入したような、現代的な意味での、認識論に関する自然主義とは明らかに異なります。すなわち、ヒュームの自然主義が人間本性（人間の自然）に焦点を合わせているのに対して、クワインの自然主義は認識論を自然科学と同一視しようとしている、という点においてです。人間本性という意味での自然は、自然科学の自然とは必ずしも同じではありません。

しかしながら、ヒュームとクワインの自然主義の両方に共通する特徴があるのです。すなわち、大まかに言うと、（特に知識についての）哲学は、私たちの知識を規範的あるいは合理的に正当化するのではなく、それがいかに生成されるのかを記述するという仕事に従事すべきだという基本的な考えを、彼ら二人の哲学者は共有しているのです。それゆえ、私が理解する限り、ヒューム哲学について積極的に強調されるべき中核的特徴は、正当化の問題を真剣に取り上げることであえてせずに、私たちの知識あるいは信念の生成を単に記述することに専念するという彼の基本的戦略にあります。ヒューム哲学に対するこの、現在有力な自然主義的な解釈に、私自身はほとんど同意しています。

一見、ヒュームの帰納的懐疑主義についてのビービー教授の見解は、ヒュームについての、この現在支配的な自然主義的解釈に同調するように思えます。彼女はヒューム哲学における懐疑主義の位置を最後には捨て去られるべき何ものかとみなしているからです。彼女は懐疑的議論について「それらは、哲学的原理を進展させる上で積極的に有害である」と述べています。むしろ、彼女は、「ヒュームの見解は、懐疑論的議論もまた炎にくべられるべき、というものであろう」と最終的に結論することで、懐疑主義者に対するヒュームの否定的な態度を強調させています。彼女の懐疑主義の否定に関する限り、彼女の観点は、今日有力な自然主義的解釈と緊密な親和性があるように響きます。なぜなら、自然主義的解釈は、ヒューム哲学における懐疑主義の重要性を減じることから立ち上がっ

てきたからです。

けれども、もし私が誤解していなければ、ビービー教授の議論はこうした論点を越え出ているように思われます。私が先に論じたように、ヒュームのであれクワインのであれ、自然主義というのは、あくまでも記述的観点から、どのように私たちの知識あるいは信念が生成されるのかという問題にシンプルに焦点を合わせる考え方だと想定されています。しかるに、ビービー教授はヒュームの議論から（記述的分析というよりむしろ）ある種規範的な含みを引き出しているように思われます。私にそのように思わせるのは、懐疑主義の重要性に否定的な価値づけを与えつつ、彼女が結論づけている言説の、次のような一説です。彼女はこう述べています。懐疑的議論は「いかなる実践的適用もできないし、そしてそれゆえに、哲学自体を、いかに私たちが自分たちの生活を生きるべきかについていかなる意義づけも提示しない学問と捉える立場である」。このことはきわめてユニークなヒューム理解です。なぜなら、私が理解する限り、ビービー教授のこの議論は、因果的推論についてのヒュームの議論が、私たちの生活をいかに生きるべきかを私たちに教えるある種の導き、よりラディカルに言えば、ある種の規範となりうると、明らかにそのように想定しているからです。けれども、正直に言うと、私は、どのようにしてヒュームについてのビービー教授の読み方を理解できるのだろうかといぶかしく思いました。いずれにしても、二つの疑念を挙げたいと思います。

初めに、ビービー教授が「実践的適用」という語で正確に何を意味しているものを知りたいと思いました。たとえば、ヒュームの議論に従えば、私たちは、炎と熱さという二つの現象の間にある恒常的接続の経験によって、炎と熱さの間の因果的判断に到達します。もちろん、私たちがロウソクのようなものに関わる何かの事物を扱うときには、この因果的知識が私たちにとって快適な生活を送るために有用であるということは、疑いなく正しいことです。しかし、ここでの有用性は、私たちが快適さや幸福を、私たちの生活で成し遂げるべきある種の基準あるいは規範としてみなすときのみ、意味をなすことができるのです。このように何らかの価値を規範としてみなすことは、経験論的な仕方では因果的知識を獲得することとは概念的に独立しています。一方は現象間の因果関係を理解することであり、他方は何らかの価値を私たちの目的とすることです。実際、因果的知識は、私たちが選択する目的に依存して、様々な仕方では使われえます。戦争や消防士の場合を思い起こしてください。そこでは因果的知識は、私たちが単に火傷しないようにする場合とは異なる仕方では使われるでしょう。この事実は、あらかじめ実践的価値を受け入れることなしには、因果的知識それ自体は実践的意義を持たないことを示唆します。実際、私たちがヒュームの議論を懐疑主義ではなくある種の自然主義と解釈する限り、「自然主義」という概念の意味に従って、私たちは記述と規範の両者を大いに注意深く区別しなければならないはずです。

第二に、私は、前の段落からは全く異なった、あるいはもしかしたら正反対の角度から別の疑念を提示したいと思います。ビービー教授は、因果的推論についてのヒュームの議論は、正当化が問題となる認識論的観点というよりも、心理的観点から提示されていると繰り返し強調しています。私は全く彼女に同意しますし、この理解は明らかに、ヒュームを自然主義者とする定評ある読み方に十分に合致します。しかしながら、逆に言うと、まさにこの点が、ヒュームの議論に関して幾分かの不十分さを私に感じさせるのです。私がここで挙げたいことは、因果関係というのは、私たちの社会においては、心理的にではなくむしろ実在的あるいは客観的に適用されていることが多々あるという点です。一つの典型は、被害者が受けた害と犯罪者が行った振る舞いと間の因果関係に基づいて、私たちが、誰かに刑事的あるいは道徳的な責任を帰する場合です。もしこの因果関係がまさに心理的なものなら、私たちの社会体系というのは、あまりに脆弱すぎる、あるいは（さらにいっそう悪いことに）誰が判断するかにあまりに依存した恣意的あるいは変動的なものであり、公的な処置を行う体系としては到底受け入れられるものではないように思われます。私たちの常識が告げること、それは、法廷での法的判断を支えるべき因果関係は、できる限り客観的に基礎づけられるべきであり、そうでなければ不当なものになってしまうだろう、ということであり、少なくとも、もしヒュームが因果関係を単に心理的であるとみなしているならば、そのような心理的現象がいかにして私たちの現実の社会の基礎でありうるかについて、彼はさらなる説明を提示すべきでしょう。

次に、私はアプリアリな知識の問題を取り上げたいと思います。ビービー教授が言うには、「ヒュームは、「観念の関係」に関する推論の説明を通じて、アプリアリな知識の源泉をすでに説明したと考えている」ということです。この点について、私の長年の疑問をお尋ねしたいと思います。「理性に関する懐疑論」での彼の議論のように、ヒュー

ムは私たちの数学的計算あるいは推論を、時間のなかで生じている私たちの心的過程であると理解していると思われます。もしそうであるならば、ヒューム哲学の文脈では数学的推論でさえ因果関係の範疇に吸収されるべきであらうと私は思います。そうすると、一つの疑問が生じるのです。ヒュームは本当にあるいは整合的に、いわゆる「ヒュームのフォーク」（すなわち、「事実の問題」と「観念の関係」の間の区別）と呼ばれるものを主張しているのでしょうか、あるいは最終的にはこのヒュームのフォークを（磨こうpolishというよりはむしろ）砕こうabolishとしているのではないのでしょうか。ビービー教授が、ヒュームについてのご自身の独特な規範的解釈に基づいて、どのようにこの点を理解するか、私は大変に関心があります。